資　料

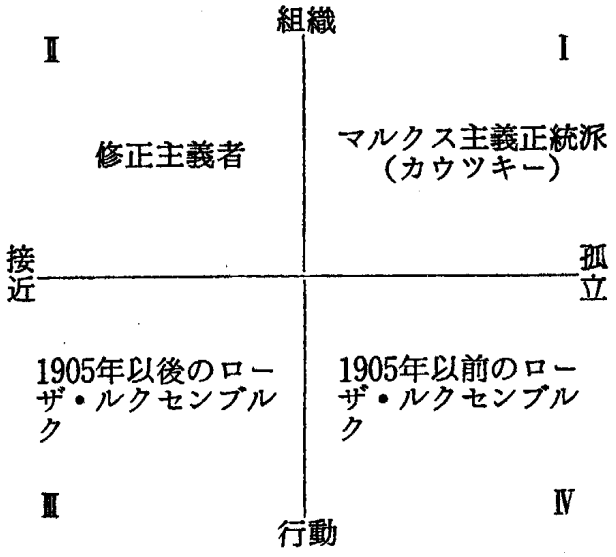
政治モデルとしてのドイツ社会民主党（1890—1914）

J・P・ネトル 著
丸　山　敬　一 訳

訳者はしがき

本稿は，J. P. Nettl "The German Social Democratic Party 1890-1914 As A Political Model"(*Past & Present*, No. 30. April 1965. pp. 65-95）の全訳である。ネトルのこの雑誌論文は，彼の大著『ローザ・ルクセンブルク』(Rosa Luxemburg, 2 vols, Oxford University Press, London, 1966）と平行して書かれ，後者の方法論を示したものとして，今までも多くの人々によって注目されてきた。とりわけ，ネトルが，この論文の中で，二組の変数——接近—孤立，組織—行動——を用いて，ドイツ社会民主党（ＳＰＤ）内部でのドイツ左翼，特にローザ・ルクセンブルクの位置を客観的に析出させようと努力したことは特筆されてしかるべきであろう。私もこの点を高く評価し，この論文を日本語に移しかえることにした。邦訳版『ローザ・ルクセンブルク』上・下巻（諫山正・川崎賢・宮島直機・湯浅赳男・米川紀生訳，河出書房新社，1974—75）を読まれる際に，合わせてお読みいただければ幸いである。

本稿のような短い論文に，訳者がくだくだしい解説を付することは避けるべきかと思われるので，ただ一点だけ，著者の試みていない方法を指摘するにとどめたいと思う。それは，上述の二組の変数を組み合わせて，図のように４つの領域を作ってみたらどうであろうかという点である。そうすれば，ドイツ社会民主党内の諸分派が一層明確に分類されて位置づけら



れるだけでなく，1905年のロシア革命の経験を契機とするローザ・ルクセンブルクの鋭い転身（領域Ⅳ→Ⅲ）も，目に見える形で図示されると思われるのである。

だが，ネトルの叙述によれば，レーニンはカウツキーと同じⅠの領域に所属し，スターリンはドイツ左翼（1905年以後のローザ・ルクセンブルク）と同じⅢの領域に所属することになるが，この点はさらに一層の検討を要するものと思われる。

このように，ささやかな訳業でも多くの方々のお世話になった。深く感謝したい。ネトルの英文は，少なくとも私には，そう易しいものとは思われない。誤訳，不適訳も多いことであろう。御教示を願いたい。

政治モデルとしてのドイツ社会民主党（1890—1914）

第一次世界大戦前のドイツ帝国においては，政党は，限られた，いくらか特殊な役割を演じていた。通常，政党を特色づけるもの——そして，政党を他の利益集団や圧力集団から分つもの——は，進んで権力を握ろうとする意志と，そうしうる組織上の能力をもち，意図された目標を社会の所定の政治権力構造を通して実現しようとする点にあると考えられている。このことは，1914年以前のあらゆる立憲社会にあてはまることであるが，ドイツだけは例外であった。ここには，政党自体が権力をふるう機会は全く存在しなかった。ドイツ帝国は政党とは何のかかわりもなく運営されていた。政府の組織と構成とは，選挙で表明された政党の力や強さとは何の関係もなく，また立法府，すなわち帝国議会（ライヒスターク）における政治的布陣をいかな

る意味でも代表するものではなかった。政党は，もちろん，消極的な方法で，たとえば，立法を妨害するとか，行政活動について政府に質問するとかいった方法で，政府に影響を及ぼすことはできた。それゆえ，帝国首相は，立法に関しては，帝国議会の過半数の支持を得ることを必要と考え，しばしばそのための複雑な駆引がなされた。しかしながら，ある時期にそのような過半数を形成しえた政党も，権力にあずかるという期待をいだくことはできなかった。彼らがせいぜい望みうるところといえば，政府と協力して，彼らの特殊利益をみたしてくれるような立法をかちうることだけであった。結局のところ，1914年以前のドイツの諸政党は，特殊利益をかちうるために，政府に圧力をかけることを試みる政治的に組織された利益集団として記述されるのがより正しいであろう。綱領の中へ諸要求を集中し，それを権力に反映させるという通常の政党の機能は満たされず，そのうえ，諸利益の集中も限られたものであった。憲法の立場からみれば，政党は全く存在していなかったのである。しかしながら，有権者の政治的願望は，組織された政党を通じて表明されたので，政府は，憲法が示唆しているように，ばらばらの個人から多数派を作りだす代りに，政党指導者との交渉によって帝国議会の内部で多数派を作り出さねばならなかった。「〔ドイツ帝国の時代に〕」諸政党は，「〔ともかくも〕現存している政府を支持するのか，それともそれに反対するのかという二者択一を次々と迫られた」[1]。事実，もっぱら政府を支持することのみを誓約させられる帝国政党という観念が，この時代の憲法思想の中に再び姿を現わしていたし，1907年の帝国議会選挙における政府による国民感情の操作は，そのような「国民的」基盤の出現を強力に暗示するものであった[2]。

ドイツにあって二つの政党だけが，この一般法則の例外をなしていた。カトリック中央党と社会民主党（ＳＰＤ）である。両政党とも，積極的な利益集団というよりもむしろ，社会的に防衛的な組織として始まったものであった。両者とも，自分たちがドイツ帝国の政治生活の通常のコースから大きく逸脱していると考えていた。このことは，中央党に対してよりも

ＳＰＤの方にはるかによくあてはまることである。なぜなら，社会主義者の反対は全面的なものであって，決して単に部分的なものではなかったからである。中央党とちがって，ＳＰＤは，現存の政治社会と折合いがつくというなんらかの可能性を思いうかべることなど全くできなかったのである。現存秩序の修正ではなくして，全面的崩壊を要求し，党の全政策をこの仮定の上に依拠せしめるという哲学をもって，ＳＰＤは，その創設の瞬間から，賤民(パリア)的立場を占めたのであった。1878年から1890年にいたる12年間，ＳＰＤは非合法であった。ビスマルクが去り，社会主義者鎮圧法が撤廃された後も，ＳＰＤはみずからが追放人であるという意識を決して捨てず，それに応じた態度をとった。非合法時代の記憶が党のイデオロギーを支配していた。それは，ちようど大恐慌の記憶が今なお今日のイギリス労働組合のイデオロギーを支配しているようなものである。いずれの場合にも——一方は政治的領域においてであり，他方は経済的領域においてであるが——自分たちが現存秩序によって拒否されたという記憶である。[3)]

このことが，ＳＰＤを政治生活におけるきわめて特異な現象たらしめた。たしかに今までも，現存体制の全面的破壊や全面的転覆を唱える政治集団は存在した。だが，それらは概して陰謀集団かセクトであって，その存在そのものが厳格な組織と秘密主義とに依拠していた。ところが，ＳＰＤは，一方で現存体制との非和解的敵対という綱領を掲げながら，他方で合法的大衆運動の中で成長してきたのである。その公式の哲学は，社会の暴力的崩壊が迫りつつあるという見解を基礎としており，その政策は，できるだけ早くこの崩壊を招来せしめることにあった。まさにスタートから，ＳＰＤは自己を社会から隔離したのである。最初は，哲学的，道徳的差異を強調することによって，後には，組織的手段によって党員を社会から孤立させることによって。かくして，分離の全イデオロギーは，社会への参加は堕落と等しいものであり，堕落した資本主義に代りうるはるかにすぐれた社会を党の内部に用意することを要求する程の強い道徳的意味あいをもっていた。実際，社会主義者たちによる公然たる自己区分はきわめ

て大仰なものであったので，彼らもまた——善行もなせば誤りも犯すという——通常の人間的行動をする能力を持っているのだ，ということを発見することが，偉大な社会学上の業績たりえたのである。このことを発見するには，マックス・ヴェーバーほどの人物を必要とした。そして，このむしろ分りきったことの発見が，今なお今日の社会学的研究において，異質にみえる社会領域を説明するための手段として使われているのである。[4] 事実，マルクス主義哲学においては，発展する階級意識という教義の本質的な部分として，この道徳的側面に今まで非常な強調がおかれてきたけれども，それだけでは決して十分とは考えられず，ＳＰＤは，党員の活動や熱意が表明されうるような組織形態をますます発展させた。だが，この二つは両立しなかった。組織が成長するにつれて，道徳的熱情は衰退した。前者は後者にとって代りうる複雑な代用品となった。

このような参加せずに反対する立場は，革命的陰謀家集団とも，体制を通して，体制の内部で活動する政党とも区別されなければならない。ＳＰＤは，もちろん，そのような参加せずに反対する政党の唯一の実例ではない。さまざまな社会で，極度の不満の状況が，時々似たような現象を生みだしてきた。フランスのＲＰＦ（フランス国民連合）は，第四共和政における全く受け入れがたい政治制度の復活に対する抗議として1947年に創設された。それは，参加することを拒否し，ＳＰＤと同じく，現存社会を絶えず騒々しく告発するために，社会の政治的諸機関——立法府や行政機関——でその存在を利用した。同様に，そのような政党は，政治組織の伝統が存在する植民地諸国が，そこから離脱しようとする際にも発生した。たとえば，インドの国民会議派，ガーナの会議人民党，フランス領西アフリカのＲＤＡ（アフリカ民主連合）などである。これらの抗議政党は，発展するにつれて，ますます植民地政府への参加を禁止した。例外は，その参加が，植民地権力の崩壊への明確な序曲となりうる場合だけであった。これらすべての場合に，権力の自発的な譲渡によるにせよ，大変動の結果によるにせよ，遺産相続の見込みという強力な要因が存在した。事実，こ

の相続への期待が，参加せずに反対するという立場を可能にし，最後的手段としての場合を除いては暴力行使を思いとどまらせる道徳的力である。このような政党は，ＳＰＤをも含めて，「相続党（inheritor party）」と呼んでよいであろう。

あらゆる政党と同じく，ＳＰＤも主として日常的諸問題に関心があった。とりわけ，指導部は，経験的諸問題に没頭し，それを党の哲学にしたがって解決しようと努めていた。この哲学を保持することと，さまざまの領域にまたがる現実問題の処理の手段として，この哲学を展開してみせることとは，知識人の仕事であった。ＳＰＤは，まさにそのスタートから，知識人をたっぷりと抱えこんでいた。第二インターナショナルにおける卓越した地位のゆえに，ＳＰＤは他の国々，わけても政府が社会主義を非合法な陰謀活動に追いこんでいるような国々から最良の頭脳をもった何人かのマルクス主義者をひきつけた。それにもかかわらず，党内部での政策をめぐるたえざる論争は，時折，ＳＰＤの存在理由そのものを問題とする程の大きな意見の相違を生み出した。このような自己験証の中で最も重要なものは，おそらく1898年に始まり——原則に関する論争としては——1903年まで続いた修正主義論争であろう。ここでは，理論，戦略，戦術——のみならず，個人的な誹謗にいたるまで——の全領域におよんだ極度に多弁な議論の詳細に立ち入ることはできない。この論争の過程でＳＰＤと社会との関連の問題が，批判的に検討されることになった。この点で，全修正主義論争は，相続党としてのＳＰＤを我々が分析するに際して注目すべき重要な事件の一つなのである。

彼らが何を，どのように述べたのかという問題に集中する代りに，我々は，誰がそれをいったのか，なぜそういったのかという問題を検討するであろう。彼らがどのような勢力とどのような理念を代表していたのかを知るためにである。修正主義者の側には，最初，社会や党政策に対する自分の経験的観察の総体に理論的基礎を提供することによって，マルクス主義哲学の重要性を無意識のうちに賞讃しているような理論家たち，たとえば

ベルンシュタインのような人々がいた。この理論的分析が，ほとんど偶然によるものであり，たえず気の進まないものであったことを知ることは重要である。ベルンシュタインの論文は，『ノイエ・ツァイト』誌の高尚な静けさの中で，書斎の仕事として始まったものであった。彼は，自分がひきおこすことになるはずの荒々しい論争の嵐など思ってもみなかった。それで，それが勃発した時驚いたのであった。修正主義は，マルクス主義的目的論に対する知的な攻撃ではなくして，たくさんの困惑させるが，しかし厳密に経験的な資料を首尾一貫して定式化しようとする手探りの試みであった。[5)]

ベルンシュタインの主たる支持者は，党の実践的な人々，すなわち労働組合の指導者たち，たまたま社会主義者でもあったさまざまな職業の実務家たち，そしてとりわけ南ドイツ選出の社会民主党代議士たちであった。これらの人々は皆，ほとんどの社会民主党員が安住していた党の社会からの孤立政策に何らかの方法で穴をあけていた。ＳＰＤ所属の法律家たちの中で，実際に実務にたずさわっている人々は修正主義者であり，他方，弁護士の資格を剝奪されたか，社会主義者であるが故に開業が禁じられていたような人々は，指導部を支持していたということを知るのは，興味深いことである。このことに対する例外は，とりわけ，リープクネヒト，ローゼンフェルト，ハーゼからなるグループで，これらの人々の法律上の仕事は，社会主義者の利益をまもり，法廷で党員たちを弁護することに限られていた。彼らは指導部を支持していたが，それは，彼らの業務が，ほとんど社会主義者の利益をまもることにあったからである。特殊な問題で国民的名声を確立したシッペルやダヴィットのようなジャーナリストたちは，修正主義者を支持しており，他方，もっぱら党出版物——とりわけ地方の——のために書いていた人々は，最も声高な正統派の支持者たちの仲間であった。

党大会には，修正主義者の突撃隊を提供し，党大会と党大会の合間には気楽に「社会」と協力しつづける南ドイツ人たちは，自分たちの地域が特殊

な諸条件をもち，異った政治的風土を持っていることを熱心に言いわけとした。党大会での討論の多くは，南ドイツにおけるこのような例外の妥当性を一般的に認めるべきか否かに集中していた。我々の見地からすれば，ＳＰＤが自治体の業務に参画でき，選挙で示された力に応じて，地方政府のポストの分前にあずかることができたのは南ドイツ諸州においてのみであったということが注目されなければならない。同様に，北ドイツと南ドイツの間の法律のちがいや，法律の解釈のちがいは，たびたびＳＰＤにとって有用であることがわかった。ＳＰＤ党員は，プロシアにおいて追放や迫害がせまった場合には，他の州に避難場所を見出すことができたからである。疑いもなく，社会とＳＰＤとを隔てる絶縁体は，より薄いものとなり，南部にあってはより浸透性のあるものとなっていた。

それゆえ，修正主義論争における布陣は，現存社会との協力の経験の有無に密接に関連していた。政策についての絶えざる討論も，この同じ問題と結びついていた。資本主義が今やすっかり柔軟になったので，社会民主党は，資本主義とうまくやっていくことができるだけでなく，実際に資本主義に影響力を行使して，それを望ましい方向にむかわせる——このことはＳＰＤが他の政党と同じ立場を受け入れることを意味した——ことが可能となったと主張することによって，ベルンシュタインとその支持者たちは，マルクスの理論的分析を変更したというよりも，政治的孤立という党の確立された慣習を変更したのであった。永久に，変更できない程に分離しているという党と社会との疎隔は，かくして打破されることとなり，単に政策が変更されるだけでなく，孤立の道徳的，組織的構造もおびやかされることになった。

この間隙に橋をかけようとする，社会主義者の陣営からの上述のような努力は，社会の側からの同様な試みと対応するものであった。ゾンバルト，シュモラー，その他のアカデミックな社会科学者たちは，社会主義者の陣営と社会との間にあるこのギャップを永続させることは望ましくないことだと考え，社会，とりわけ政府を説得して，行政および立法におい

て，労働者階級に歩みよらせようと試みた。[6] ゾンバルト自身は，長年にわたって，マルクス主義の海岸にそって航行した人物であり，実際に社会民主党を社会から孤立せしめているものは，政策ではなく——政策は変更しうるものであった——分離のイデオロギーや哲学であって，それは社会との接触によってのみ破壊されうるものである，と考えていた。これに対して，ＳＰＤの知識人，メーリンクやルクセンブルクは，ゾンバルトが真実に近いことを述べていることは認めたけれども，講壇社会主義者たちに対して，特別に辛辣な憎悪を抱いていた。私的には，ゾンバルトの意見の中にも，いくつかの正しい点のあることを認めていたのだが。[7] どれほど逆説的にみえようとも，社会主義陣営内部での修正主義への誘因は，専門職の人々，労働組合指導者たち，南ドイツの政治家たちから生じたものであるが，他面で，無関心で気の進まぬ大衆を説得するという，しかるべき努力を払ったのは，ゾンバルトのような少数のアカデミックな知識人たちだけであった。

ＳＰＤ内の修正主義者たちに反対する陣営には，二つの主要なグループがあった。社会と社会主義の間の間隙は当然なものであり，望ましいものであると信じている人々——マルクス主義者たち——と，社会の方がとても修復できない程自分たちを放り出したのであって，社会主義者の孤立は，主として政府の政策や態度の産物なのだと信じている人々である。[8] 当時にあっては，この二つの見解の間に目に見えるような差異はなかった。ＳＰＤ執行部と，それを真に支持する人々の勢力は，修正主義者に比して，後になるにつれて確実に低下したが，1901年から1903年の間に，あらゆる戦線で社会から自分たちを護る防壁の破れ目の補修がなされた。年代記的にみれば，1903年の党大会における修正主義者の敗北にすぐ続いてドイツにおける革命的時期が始まった。すなわち，一連の労働組合のストライキが，プロシアにおける選挙法改革を求める政治的アジテーションと一致して燃え上ったのである。つづいて，1905年１月のロシア革命の勃発が，ＳＰＤにかなりの衝撃をもたらした。それゆえ，どの点からみても，修正主義者

の敗北ののちに，社会民主党と社会との間のより一層鋭い対決があらわれたのである。全般的な満足の雰囲気の中で，勝利者の陣営の中には，この上さらに自己験証を要するような論点はなかった。だが，修正主義者に対抗して，「古き試験済みの戦術」をまもるために，戦陣を組んだことが，事実上，二つの異なったグループの同盟とも呼ぶべきものを作りだした。1906年以後の政治的不振の時期，とりわけ，1907年の帝国議会選挙での社会民主党の敗北ののちに，党の正統的多数派は，徐々に二つの異なった，ついには相闘うグループへと分裂していった。この特殊な闘争が発展して，ついには，修正主義論争よりも，はるかに大きな歴史的重要性をもつヨーロッパ社会主義の分裂をもたらしたのであった。つまるところ，共産主義と社会民主主義の分裂を生みだしたのは，修正主義者に対抗していた多数派のこの分解なのである。本稿の後半は，この問題を取扱うことになろう。

表面的には，この分裂は政策についてのますます増大する対立となってあらわれた。1910年から1914年にかけて，ＳＰＤは，直面したほとんどすべての問題で政策の二者択一を迫られた。たいていの最近の歴史学は，かなりのこじつけを伴なってではあるが，この分裂を政策の観点から分析してきた。最も近年の包括的なＳＰＤ史は，さまざまな問題での協力関係を体系的に分析し，それを年代記的に取り扱うことによって，いろいろなグループの出現を跡づけている。同時に，以前試みられた社会学的な分析の可能性は，わざと軽視されている。[9] しかし，政策決定という観点から体系的にグループやサブ・グループを分類してみせるというこの試みにもいくつかの困難がつきまとっている。[10] 一つには，この方法は恣意的で，同時に過度に複雑である。これらの政治「グループ」の構成と大きさとは，たえず変化しており，結合のための真の基盤を持っていなかったのである。我々がＳＰＤを正しく——本来の政治社会として——観察するやいなや，これらのグループの政策も，これらのグループ自体でさえも，その意味の大半を失ない，こうしたグループを基礎とする歴史叙述は，政策とか政府形

成のための離合集散という観点からみた第三共和政下のフランス急進派の歴史叙述のように恣意的なものであることが分るであろう。戦前のＳＰＤの動揺常なき中間的立場は——戦時中は，独立社会民主党（ＵＳＰＤ）として結晶したが——本来，永続的に存在するための現実的基盤を持っていなかった。そして，事実，1920年には，なんらかの重要性を持った政治的要素であることをやめた。ＵＳＰＤは，戦時の軽挙盲動の産物なのだと主張することもできるのである。それゆえ，中心となる分裂を探りあて，投票のためのつかの間の陣容を，その時々の個人の結集として取扱う方が，より意味があるように思われる。当然のことながら，政策に関する論争があり，人々は，それぞれの機会にそれぞれ異なった陣営に並んだのである。だが，その根底には，左翼と右翼の間の基本的差異にもとづく一貫した対立があった。それを，ＵＳＰＤの出現が一時的に曖昧にしただけのことである。通常，この最終的な分極化は，もっぱら第三インターナショナルを通じて作用したソヴィエト同盟の引力によるものであり，もしソヴィエト同盟が存在しなかったならば，二つの陣営への社会主義者の分裂もまたありえなかったであろうという主張がなされる。しかしながら，筆者は，この特殊な分裂は，すでに1914年以前にドイツ社会民主党に巣喰っていた風土病であり，いずれなんらかの形で起ったであろうと信ずるものである。

この問題を検討するのは，なぜそれ程困難なのであろうか。その理由は，大部分ＳＰＤ自体の中に求められねばならない。地方の党大会から始まって，ついには全国的な党大会にいたるまでの代議員たちの毎年の会合では，見解の自由で完全な表明が許されてもいたし，奨励されてもいた。そのような状況のもとでは，普通，かくされた意図を詮索する必要など全くないと考えられる。人々は見たままの真実を語ることができたし，事実語ったのである。党内の反対者たちも，間もなく，相手をあざむこうという——時には無意識でさえある——意図を放棄したのである。少なくとも，1912年まではドイツの政治体制のもとでは，あの程度の得票では意味

がないという理由で票集め政策が嘆かれていた。自己表現に関する限り，ＳＰＤは極度に民主的であった。党出版物は，広範囲に諸問題を論じており，あらゆる異った見解の表明に紙面を提供していた。1911年以後，このような慣習は次第に切り詰められ，執行部に対する極左からの反対は，一定の検閲なしに，その見解を党出版物に印刷してもらうことが困難になった。しかし，戦争前のほとんどの期間は，どのような見解にせよ，公然と表明することができた。党大会においても，意見の表明を制限しようとするいかなる試みもなかった。ただ発言時間の制限があったのみである。1913年においてすら，ローザ・ルクセンブルクとその支持者たちは，強烈な表現をもった大衆ストライキに関する決議を提出し，それについて詳細に論ずることができた。[11] あらゆる立法府と同じく，ＳＰＤの大会も，極めて注意深くみずからの権利と特権とを防衛した。ギロチンもなかったし，議事運営規則もゆるやかなものであった。とりわけ，反対派は国中いたるところで開かれる集会で，自分たちの見解を表明する機会をいくらでも持つことができた。地方の党書記たちは，党の路線を押しつけようと試みるよりもむしろ，党員たちに有意義な夕べを提供するために，面白い，人々を振いたたせるような話し手を得ることに関心を抱いていた。ここでもまた地方執行部が，1912年以後しばしば拒否権の行使を試みてはいたのだが。[12] それほどの公然たる自由な討論があって，なお解くことのできぬ神秘を探ろうとすることは，無駄な試みのように見えるかも知れない。

主として公的な記録や公刊された論文をもとにして書かれた歴史はいずれも，ＳＰＤには意見の自由な交換があり，大会での多数決による決定がある——全く公開で民主的である——という印象を与えるにちがいない。大会をあざむき，あるいは，議題を大会にかけずにおくという稀にみられた試みは，通常は失敗し，加えて人々の憤激をまきおこした。だが，大会議事録や，とりわけＳＰＤ指導者たちの私的な文書を注意深く分析してみると，最後の数年間に舞台裏でますます策略がすすみ，加えて執行部でさえ，議事録や連絡文書は——成功裡に機能している行政上の文書と同じ

く——特別なものとして秘密にされるべきだと主張しはじめていたことが分るであろう[13]。この露骨な要求は，騒々しい抵抗に出合った。だが執行部の態度は多くの人々に支持されていた。執行部は，ここから教訓を学び，たとえば，1913年のラデク除名事件の際には，党大会の感情を慎重に配慮しながら，この問題を処理した。圧倒的な民主主義の外観が，中身の欠除を欺瞞的におおいかくしていたのである。執行部は常に，重要な問題で公然たる敗北を喫しないように，さまざまな方法で策略をろうした。帝国政府と同じく，党執行部も，立法機関というものは愚弄するよりも操作する方がよりたやすいということを知ったのである。だが，操作することは，必然的に歪曲することである。

しかし，ありとあらゆる問題についての洪水のような討論にもかかわらず，実際には，普遍的にみとめられたいくつかのタブーがあった。このことが，我々の困難を増大させている。というのは，これらのタブーは，もしそれらが十分に討論されていたならば，我々が今取扱っている問題に照明を与えるような論点に主としてかかわっていたからである。そんなわけで，1882年から1914年までの全期間に，社会民主党の理論機関誌『ノイエ・ツァイト』には，革命後の社会をテーマとした論文はたった一篇載ったのみであり，しかも，この論文は，問題を単に歴史的文脈において——過去になされた至福千年社会の討論という形で——取り扱っていたのみであった[14]。革命そのものでさえほとんど討論されなかった。革命の方法については全く論じられなかった。是非なくてはならぬ戦争についての議論も，単に大声で非難さるべき抽象的な悪としてのみとりあつかわれた。関心はもっぱら同時代の諸問題と，現在の社会主義者の立場からみてこれらの問題がどのような重要性をもっているかという点に集中しており，SPDの未来に影響を与えるようなより広汎な問題は無視されがちであった。修正主義論争ののちには，ほとんどの党員たちは，社会民主党と社会との正面きった敵対関係と，革命による最終的浄化（カタルシス）を当然のこととみなしていた。組織問題は，直接的技術的側面を除いて，忘却の淵にあった。組織と

政策を関連づけようという試みもなかった。それ以上に，そのような問題は，むしろあまり重要でない単なる技術的な問題にすぎず，したがって，当然に指導部が関心を持つべき事柄と考えられていた。政策はだれが論じようと自由であったが，ＳＰＤの構造や行政のスタイルを批判しようとする人はだれでも，はじめから，奴らは経験が足りず，自分が何を語っているのかよく分ってはいないのだ，とされた。[15] 1900年と重ねて1911年に，執行部の再編成と拡大というような重要な組織上の変化があったし，1912年にも党統制委員会の役割の変化があった。興味あることは，こうした変化が，かなりな無関心と沈黙の雰囲気の中で起ったということである。[16] 問題になったのは，誰がその地位を占めるのかということであった。我々が後にみるように，指導部に対する急進主義者の反対の根拠は，組織的タブーの打破であった。政策に対する表面的な批判の下に，ローザ・ルクセンブルクその他の人々は，組織とその役割についての根本的な問題を提起し，社会民主党と社会との関係を明確にしようと努力した。

1914年以前に，組織問題を直接に社会民主党のより大きな目標と結びつけようとする唯一の徹底した試みは，レーニンによって，『何をなすべきか』の中でなされた。レーニンの批判者たちは，ロシア人であれ，ドイツ人であれ，レーニンの主唱した中央集権的コントロールというやり方に異議を申し立てた。しかし，レーニンの実際的見地以上に彼らにショックを与えたものは，組織問題を第一級の重要性を持った問題にまで引き上げようとする考え方そのものであった。ロシア社会民主労働党第二回党大会の間も，またそののちにも，メンシェヴィキとボルシェヴィキは，それぞれ，このことを問題にして討論し，正確な定式化の必要性を主張したのであった。当時，ロシア社会民主党とドイツ社会民主党を結びつける環として活躍していたローザ・ルクセンブルクは，一般的見解を次のように明瞭に述べた。

「社会民主党の組織概念から我々が学ぶべき教訓は，統合し，結合するという……組織の基本的役割と精神であって，特殊な，排他的な，構造的

な側面ではない……」[17]

ボルシェヴィキとＳＰＤの組織観の正確な比較は，両者をとりまく状況が全く異なっていたがゆえに不可能である。しかし，この両者が，各々正しい組織論のために貢献した重要性を相対的に比較してみることはできる。ＳＰＤの状況が，ロシアの党の組織とは異なった組織を要求していた——前者は合法的大衆運動，後者は非合法の亡命者陰謀集団——ということは，それ程重要なことではなく，むしろ重要なのは，ドイツの党が政策と組織との間にいかなる関連もみていなかったのに対して，レーニンは，この関連こそが，問題の核心であると考えていた点である。おそらく，この差異は，問題を一度ひっくり返してみれば，より一層明白なものとなるであろう。ＳＰＤは常に正しい政策を追求していた。ＳＰＤの性格と力量とが，党員たちに，当時のほとんどすべての主要問題に異議を唱える権利を，時には義務をさえ与えていた。ＳＰＤは，政策においてどれ程異なっておろうとも，社会の熱狂の多くを分ち持っていた。組織はこれらの政策に奉仕しなければならず，とりわけ成長の政策に奉仕しなければならなかった。他方，レーニンは，ただ突発的にロシア社会に影響を及ぼすことができただけであった。レーニンの全世界は，一つの小さな闘争する陰謀家集団であり，そのような世界にあっては，組織の内部問題は，きわめて重要な問題としてあらわれた。組織は成長と同意語ではなく，統制と同意語であった。正しい権力構造なしには統制はありえず，それゆえ党はありえなかった。当時のドイツの状況の中で，副次的な要素としてよりも，むしろ創造的な要素としての組織構成に没頭することが可能であったかどうかという問題は，また別の問題である。ドイツの急進的反対派のみが，この問題がどれほど重要なものであるかに気づいていたということを，我々は後に見るであろう。もっとも，彼らは，他に取るべき明白な道を提出することによってではなく，党の組織的な自己満足に破壊的な猛攻撃を加えるという見地からこの問題を取り扱ったのである。

ドイツにおける修正主義の敗北——少なくとも討論の次元での——は，

社会民主党と社会との関係の問題を一時的に解決した。ＳＰＤは，徹底して孤立へと立ちもどった。安んじて自己の無実を明らかにすることができた。今や，正統的多数派は，第二インターナショナルでの卓越した地位を利用して，他の諸政党にも同様な孤立の政策を押しつけることができるほで強力であるとみずから感じていた。1904年のインターナショナル・アムステルダム大会で，この問題は，ドイツ人とフランス人の間の激しい討論にさらされた。ドイツ人が，禁欲による力，孤立による党の成長を主張したのに対し，フランス人は常に，力は政治的実力としてのみ測られうるということを主張した。

「現在，ヨーロッパおよび世界において，平和の保証および社会主義と労働者階級の前進にとって最も気にかかることは，ドイツ社会民主党の政治的無力さである[18]」。

政治上の討論は，社会的含意で一杯であった。多くのフランス人にとっては，孤立した社会主義者の運動の中での自足した社会的，個人的大望などという考えはおよそ意味のないものであった。社会主義者の「共同」という考えそのものが軽蔑をもって取り扱われた。大会ののちブリアンは云った。「同志，同志，私はこの同志愛なるものにうんざりしている[19]」。最も重要なことは，ジョレスが孤立の哲学と——その哲学者，すなわち，「君たちのよき同志カウツキーが，その死にいたるまで君たちに提供してくれるであろう政治的処方箋[20]」に対して特別の軽蔑をそそいだことであった。この論争点は，1898年以来のすべてのドイツの党大会に提出されたのと全く同じ形でアムステルダム大会にも提出されたのであるが，フランス人は，ドイツの修正主義者たちよりもはるかにはっきりと論点をみており，彼らの主張を，孤立か参加か，という形でより明確に表現した。だが，このことは，理論の問題ではなくして，すべての社会主義者の個人的問題にかかわることであった。その返礼としてドイツ人は，一年前にドレスデンの党大会において採択した決議を，ほとんどそのままの形でインターナショナルの大会にも提出し，フランス人の反対をものともせず，それを通過させ

たのであった。

勝利は十分に利用された。1904年から1914年にかけてＳＰＤの組織とサービスは着実に増大した。政治的な面では，中央執行部が拡大され，地方組織が強化され，新しい地方組織が作られ，あらゆる党機関でますます多くの役員が任命された[21]。同様に重要なのは，公表されることの少ない社会的・文化的領域での拡大である。党教育は，1906年の党学校の創設と巡回講師——教育コースをたずさえて各地を巡回してあるく講師——制度の拡充と改善によって促進された[22]。党は自分たちだけの旅行団や歌声グループを組織し，さらには，詩も書けば歌もつくるという一団の「労働者詩人たち」に賃金を支払いさえもしたのである[23]。特に強調されたのは，子供や青年のためにサービスを組織することであった。1912年には，125の地方子供委員会があり，574の青年委員会があった[24]。婦人運動は，献身的なクララ・ツェトキンの後援で急速な進歩を遂げた。最後に，地方組織のメンバーが酒場に集まり，党に献金し，物事を議論し合う，いわゆるツァールアーベント（Zahlabend）は，一般大衆レベルでの社会民主党の最も重要な社会制度となったばかりでなく，政治的意見の集約点ともなり，また，執行部も反対派もともに党員に接触しうる公認の手段ともなった。この問題は，とくにフランス，オーストリア，イギリスなどの同様な活動との比較という観点から，それ自体充分に研究に値するものである。

これらの制度は，奇妙な予期しない目的に奉仕しはじめた。地方の党出版物は，才能ある若者たちを集め，かれらを社会主義者の軌道の中にとどめておくためのタレント養成所となった。ジャーナリストが，さまざまな出版物に複雑に交差して所属するという仕組みは，戦争直前の数年間に発達した。さらに，成長する党出版物の背後には，ますます増大する予算をかかえた出版社のネットワークが立っていた。Ｊ・Ｈ・Ｗ・ディーツとフォアヴェルツの書店は，いかなる商業的出版事業の総売上高ともゆうに匹敵しうる程の売上高を誇っていた。

この組織的増殖が生みだした二つの顕著な特徴は，とくに強調しておく

必要がある。党は今まで全く手を触れなかった，あるいは党に対して反抗的でさえあった領域にまで網をひろげた。おもに農村諸州を組織するための努力が払われた。「処女地（シベリア）」での割り当てられた仕事に成功することが，党の高い地位に着くためのパスポートとなった[25]。活動の拡大にともなって，統制もまた拡大した。かくして，1906年から1908年にかけて，統制は，ほとんどが急進派に所属する——著名な修正主義者ルートヴィック・フランク博士が，この分野で活躍していた南部は例外であったが——献身的な個人の指導の下に自発的に作られたものである青年組織さえも襲った。その結果として，1908年以後党員は確実にふえた。だが，急進主義者の熱情（エラン）は組織からしめ出されるか，あるいは少なくとも戦争までは地下に追いやられた[26]。

第二に，新しく増大した活動をうまく処理していくために，党の組織構造の中に直接の対応物が作り出された。出版物が増えるにつれて，出版委員会が，数においても，権力においても増大した。青年問題は，侮り難いフリードリヒ・エーベルトの下でユーゲントツェントラーレという形で組織的救済を見出した[27]。組織はしばしば，それが規制しようと意図する活動に先立って作られた。たとえば，党学校を設立し，それに忠告を与えるために，1906年にまずもって教育委員会が設けられたように。戦争にいたるまで，官僚制の発生に反対する風潮は存在しなかった。どちらかといえば，左派も右派も，この組織的増殖を，自分たちの主張の制度化された支持の一形態として擁護していた[28]。権威主義的な規制や統制を伴うくらいなら，政府の権力を制限して，そのような活動なしに済ます方がましだというようなイギリス人やアメリカ人の考え方は，彼らにとって全く異質なものであった。

1911年までにはすでに，ＳＰＤは国家内の国家というあらゆる外観をそなえており，ベーベルが冗談に執行部を「あなたがたの政府」と呼んだ時，その言葉に異議を申し立てる者もいなかったし，驚きを表明する者もいなかった[29]。この「政府」は，厖大な党機関を統轄し，そのために莫大な

経費を支払っていた。ＳＰＤの財政は，第二インターナショナルの羨望の的であった。その卓越した地位は，経済的気前よさによるものであると一般に認められていた。[30] 党大会のたびごとに提出される執行部報告の前文は，帝国政府の予算案と全くよく似ていた。つまり，両者とも，一方の側に歳入を，他方の側に歳出をひとまとめにして掲げていた。そのうえ，執行部報告自体も，ますます福祉事業，社会活動，組織の成長や影響力の程度を表示する指標——たとえば，党新聞の発行部数など——に関心を移していき，これらの項目が，時代の重要問題に関する演壇上での討論よりも優位を占めていた。党大会は，年に３日か４日開かれたが，これは，いわば帝国議会の縮小版ともいうべきものであった。だが，これは形態においても，内容においても，ドイツの他のいかなる政党の年次大会とも似ても似つかぬものであった。他の諸政党の年次大会とはちがって，それは，指導部が支持者たちの感情をテストすることのできる単なる公開討論会ではなかった。それ以上に，党大会は，ＳＰＤ国家の中では重要な制度的役割を持っていた。意見を異にする人々の抗議が，どれほど鋭いものであっても，いざ党の団結そのものが危うくなるという時には，党大会において再び執行部に勢力を結集しなおすということができたのであった。問題が何であり，不一致がどのようなものであったにしても，偉大な人々と腹蔵なく話し合い，協力して，十分に仕事をしたという感情を抱くことなしに大会を去る代議員はほとんどいなかった。ベーベルの私信が示しているように，この雰囲気は決して自然発生的なものではなく，個人的接触と説得を通じて前もって注意深く準備されたものであった。[31]

政治指導部と労働組合の間の論争の危険は，1906年２月の秘密協定によって除去された。この協定で，ＳＰＤ指導部は，労働組合に対する攻撃的政策を避け，あるいは調子をおとすことを約束した。その代りに，労働組合指導部の方も，彼らだけで独自の政治路線を確立しようとする試みを放棄した。もっとも，労働組合運動を組織された社会民主党から分離させようという試みは放置されたままであったが。ドイツにあっては，政治的社

会主義が，組織された労働組合主義を先導してきた。それゆえ，社会主義は，つねに労働組合を産業分野での専門家と考え，顧客と考えてきたが，豊かで勢力の増大しつつある労働組合は，ますますこの関係をやっかいなものだと思いはじめていた。今や，労働組合を成人に達したものとみとめることによって，摩擦は減少し，こののち，労働組合指導部は，左派と敵対しているＳＰＤ執行部を支持する点で重要な役割を演ずることになったのである。党指導部も労働組合指導部も，それぞれの領域を明確に限定しあうことによってよりもむしろ，みずから節制することによって，お互いの組織的領分を犯すことのないよう注意を払った。このように相互に自己規制しあうという協定が，たくさんの訓練を積んだ党員をＳＰＤ「国家」の中につれもどした——だが，それによって最も平凡な政治的利益をのぞくすべてが犠牲に供されることになったのだが。労働組合と党との調和は，当時の大陸にあってはユニークなものであった。いかなる他の要因以上に，この調和という要因こそが，これほどにまで社会民主党が「国家」として発展することができた理由を説明してくれるのであるが，それはまた同時になぜ社会民主党が活動能力を喪失することになったのかをも説明してくれるものである。[32)]

すべてこうしたことが，ＳＰＤ指導部の力を非常に強化した。サービスと組織の増殖から不可避的に官僚制が発生してきた。官僚機構は，政策の問題に関しては，みずから「中立」と考えていたが，いつでも執行部を支持し，また逆に指導部による統制の組織上の装置となっていた。一つの制度として，党官僚制もまた，それ自身の，公然たるものではないが強力な利害関心を持っており，それは，執行部によって効果的に代表された。民主主義は，寡頭制の敵ではなく，むしろその最も肥沃な土壌であるという真理は，すでに19世紀からみられる政治現象として，アメリカ合衆国を研究していたトクヴィルにとっては明白なことであった。[33)] この予言は，ロベルト・ミヘルスによって，現存の事実としてみごとに立証された。[34)] 彼の中心的なテーマは，社会と政治の分野では民主主義と寡頭制の関係の問題で

あったが，彼の著作には，彼が必ずしも最後まで追求することのできなかった付随的な洞察が満ちあふれている。かくして，寡頭制の機能的表現およびみずからの権力増大の一層の手段としての官僚制の発展は，簡単にしか論じられていないし，国家内の国家という概念もただ一度だけ述べられているにすぎない。[35] ミヘルスはまた，「党と国家」——我々の言葉でいえば「党と社会」——の関係という問題を認識してはいたが，強調しはしなかった。[36] 後の歴史家たちは皆，ミヘルスの著作に敬意を表してはいるが，彼の特異な思想を一層発展させた人もいなければ，それをドイツその他の地域の党政策の分析に利用しようとした人もいなかったのは奇妙なことである。

最後にもう一つ述べておかなければならないのは，イデオロギーそのものが，より強固な構造をもった新しい内省的な党にあっては，今までにない特殊な役割を演じ始めたという点である。イデオロギーは，衰退していくどころではなく，相変らず継続してはいるが，定義そのものからいって「効果のない」あるいは「無駄な」政治活動をおおいかくすのに恰好のこうもり傘を提供した。党が，みずから孤立すればするほど，ラント議会や帝国議会での選挙活動やサービスの中で（世論に受け入れられる）論点は，ますます少なくなり，イデオロギー的隠れ家がそれだけますます重要になった。1905年以後，党大会は最高の立法集会であることをやめ，政治的イデオロギーの儀礼的祝賀式となり，「単に敬意を表すための……祝祭」となった。参加者は，そこから気分を新たにして散会し，イデオロギー的清涼剤をひろめることができた。党大会の産物，すなわち，古きよき外部向けの革命的イデオロギーの主張は，単にこのイデオロギーの所有者であるＳＰＤに対して絶えず忠誠と献身とを保証するための手段にすぎなくなった。今日でも，スウェーデンのようなプラグマティックな国においてさえ，イデオロギーは，支持者や党員を，より大きな忠誠心の鋳型にはめこむための一つの道具とみなされている——社会学者たちが純粋に機能的な用語でそれを研究している。ＳＰＤも彼らの理論のための基本的モデルと

して役立つことであろう。[37)]

これらの影響は公然とは現われなかったけれども，党の中に自分たちが同一であるという精神状態を生み出した。修正主義論争において，社会と関係を持つことなしに，党内問題に没頭することを主張する勢力が勝利を収めたことは，これらの勢力が繁栄するのにふさわしい政治文化を作り出した。だが，このことは，修正主義論争における執行部の勝利の偶然的結果ではなかった。むしろ，反対であった。というのは，正統派——一方における「マルクス主義者」と，他方における孤立を社会の側の態度によって強制されたやむをえざる結果と考える人々——の言葉の上での説明の下に，まさに官僚機構の利己主義があり，この官僚機構は，その権力と存在とを大部分——理由はどうであれ——ＳＰＤの孤立政策の継続に負っていたからである。1901年以後，これらの勢力がどのようにこの論争に入りこみ，正統派の背後で決定的に重みを増してきたかはきわめて注目に値する。カウツキーが，修正主義は，もし勝利を収めたならば，社会民主党の基礎そのものを破壊してしまうであろうと述べた時，彼は現状を維持していこうとするベーベルとその同僚たちの真の利己心を，期せずして明瞭に述べたのであった。社会民主党がなぜ孤立していなければならないかという問題は，かなりの程度まで形式的なものとなり，その実質は，社会民主党を孤立させておきたいと思う有力な分子の利己心なのであった。

それゆえ，ＳＰＤを他の「相続党」から分つものは，孤立の現状に満足し，活動能力を持たないというこの有力な要因である。そのうえ，成長しつつあるＳＰＤ国家は，特殊な必要にしたがって，それに応じた独特の形態をとったのではなくして，孤立しておろうとおるまいとＳＰＤを包囲している社会のパターンにしたがった形態をとったのである。ＳＰＤ内部にもう一つ別の社会を創り出すことは，ドイツ帝国社会を再現することであり，そのミラー・イメージを創り出すことであった。イデオロギーは，必然的にその時代に役立ちうる知識の反映であり，したがってユートピアとは鋭く区別される。[38)] 我々がすでにみてきたように，未来社会——ユートピ

ア——に関する詳細な討論は存在せず，それは空想的なものとして眉をひそめられたので，ＳＰＤ社会にとっては，自分をとりかこんでいる社会——この二つの社会がどれほど敵対的なものであったにせよ——以外に模倣すべき他のイメージはありえなかった。このことは，組織形態に関していえるだけでなく，態度についてもいえることであった。組織された社会民主党が，〔彼らをとりまく〕社会を反映している最も顕著な実例の一つは，無意識の民族的態度の中にみられた。公式には，ＳＰＤは民族主義に反対していた。だが，私的にはベーベルはイギリス人とロシア人の双方に対して，かなりの憎悪を示した。[39] とりわけ興味あることは，ベーベルが私的に，ＳＰＤ内部の反対者に対して用いたのと同じ月並みな悪口雑言を用いて外国の社会主義を荒々しくののしった——彼らも社会主義者として同じ家族の一員のはずであるが——のに，イギリス政府に言及する場合には，一国の元首が他国の問題を論ずる時のような外交的儀礼を暗にまもったという点である。[40] 公的な態度と私的な態度の差は，しばしば忘却された。かくして，ＳＰＤは，自国のポーランド人問題を，社会の他の人々の問題とほとんど同じやり方で——理解することなく——処理しようとした。ポーランド人は，社会主義者として扱いにくいだけでなく，市民としても扱いにくいものであった。唯一の解決策は，組織的吸収であったが，これは単にゲルマン化政策の社会主義的翻訳にすぎぬものであった。[41]

他のグループに圧力をかけ，またそれに反対するために組織されているグループは，その相手方の構造を模倣する傾向がある。[42] 我々が後に見るであろうように，1912年以後，この二つの社会を接触せしめるための一形式が，その頂点において発達し，このことが，この二つの社会の類似の過程を一層促進したのであった。「我々は，社会民主党執行部と，その諸機関の組織形態の中に，ヴィルヘルム２世の帝国ドイツとその政治指導部の組織の無意識のミラー・イメージをみることができる」。[43]

さらに，もうひとつ，哲学がＳＰＤの立場を強化するのに役立っていた。このことは——全く自覚されることなく進んだ——社会の組織的ミラ

ー・イメージにはあてはまらないが，孤立の必要には全くぴったりとあてはまる。カール・カウツキーは，『権力への道』の中で，この孤立に積極的内容を与え，それを政策の嘆かわしい副産物から積極的な革命的要因にまで高めたのであった。[44] ある目につく現象を，わずかばかり独創的にこねまわして，これにマルクス主義理論の立場から聖なる承認を与えようと試みることが，カウツキーに特徴的なことであった。彼を軽蔑していたパルヴスは次のように述べた。「豊富な内容がすべて〔マルクス主義〕からたたき出されてしまっている。カウツキーは，マルクスの良質の練り粉から硬パンを作り出した」。[45] 簡単にいえば，カウツキーの見解は，孤立した社会民主党の直線的な成長が，主観的にも客観的にも，社会が解体し，社会民主党がそのあとがまにすわることができるような大破局を反対陣営の中にひきおこすであろうというものであった。これは，最も極端な形における相続党の理論であった。内的な強さの指標として，カウツキーは，理論的純粋性を主張した。[46] だが，成長の指標としては，彼は来るべき（1912年の）帝国議会選挙における得票率と議席数の増大を示唆した。党は，1907年の後退ののち，この選挙に特別の期待をつないでいた。必ずしも執行部と完全に一致していたわけではないが，カウツキーは，この時までに執行部のイデオロギーの特別な解説者になっていた。彼は社会的孤立のチャンピオンであり，知識人であって，組織の直接的な問題から遠く離れていたし，社会との接触からは更に遠く離れていた。それゆえ，彼が——たとえ，しばしば執行部にいら立ちを感じ，自分自身を進歩の勇ましいチャンピオンだとみなしていたにせよ——党指導部の暗黙のイデオロギーを忠実に首尾一貫して反映していたというのは何ら驚くに値しないのである。[47]

だが，カウツキーの分析は，それ自身を破壊する弁証法を内包していた。選挙での成功を社会転覆の積極的要因として強調することは，来るべき選挙について党につきまとつている強迫観念を説明するものであると同時に，正当化するものでもあった。1912年に，社会民主党が，1907年の敗北をつぐなっただけでなく，偉大な前進を記録した時，カウツキーの理論が

十分に正当化され，勝利を収めたようにみえた。[48] だが，帝国議会における議席数に対する関心の増大は，社会民主党議員団の党内での重要性を増大させることに役立ったのである。このことの多くは心理的なものであった。ＳＰＤが成功する強力なチャンスを持っている選挙区で帝国議会への当選を求めることが，ＳＰＤの最も重要な指導者たちにとっての実践であった。党の思考の中で，選挙での成功の重要性が増すにつれて，帝国議会議員の地位もまた上昇した。社会主義議員団は，もはや単に党の名士からなるというだけでなく，そのメンバーのために特別の団結と地位とが与えられることになった。この差異は重要なものであるが，いままで正しく理解されてこなかった。[49] 驚いたことには，今世紀の始め以来あらわれていたにちがいないこの傾向が，何らかの弊害をもたらしたという証拠はほとんどない。しかしながら，1912年までには，すでに党生活の多くの不満な局面に目ざめていた反対派は，「帝国議会議員という称号が，これら善良な人々の頭を狂わせる」[50] 現象についてキャンペーンを展開しはじめていた。

いまやＳＰＤは110議席を持ち，帝国議会での最大の単独政党となったので，直接に政府の業務にたずさわることはなかったにせよ，少なくとも立法府の通常業務にはますますかかわりをもつようになった。もはや，単に禁欲しているわけにはいかなくなった。そして事実，しばらくの間シャイデマンが，帝国議会副議長の地位に着いたことすらあった。この試みが，更に一層おしすすめられなかった理由は，正統派社会主義者の側にある。彼らは伝統的儀式が要求する時には，副議長が，フロックコートに身をつつみ，皇帝に礼拝し，「万歳」を先導することに良心の危機を感じたのである。それはともかくとして，興味あることは，副議長のポストを受け入れるかどうかが，今なお考慮の対象となり——しかもそれが一般的禁欲という政策の範囲内で考えられていたという点である。

党内でＳＰＤ議員団の重要性が増した時期は，時間的にみて，帝国議会自体の重要性が増した時期と一致していた。戦争に先立つ二年間，ドイツには神経の危機があった。これは，時の宰相が追想録の中で，帝国的不快

（民族的幻滅）と呼んだものであるが，——それは，後にみるように，党内部に生みだされていた不快の悪感と即座に照応しあうものであった。[51] このような不安な雰囲気の中で，ツァーベルン事件のようなたくさんの特殊な事件が起った。その際，帝国議会はきびしく政府を批判したが，軍部のような明白にコントロールしがたい帝国権力の増殖に関しては政府に力を貸すことを申し出た。[52] 帝国議会が政府の救援におもむこうと試みたのは，これが最初ではなかったが，1912年以後，帝国議会は力の見地からますますひんぱんにそうするようになった。[53]

このように帝国議会の重要性が増すのにつれて，ＳＰＤ議員団は，党内の１グループとしてその権威を増した。——だが，他方で，これら二つの切り離された社会の間の無意識の相互作用もまた増大した。頂点での，とりわけ立法府での議員の地位の重要性を通じて，ＳＰＤの孤立は現実のものというよりも想像上のものとなっていった。全面的対決のスローガンはまだ存続してはいたが，現実的な接触や協力はますますひんぱんになっていったのである。この実例はたくさんある。おそらく，その中で最も重要で騒々しい事件は，帝国議会内にむりやり左翼ブロックを作りだすことによって，1912年の決選投票後のＳＰＤの有利な立場を利用しつくそうとする試みであろう。指導部とカウツキーは，このブロックをＳＰＤにのみ有利な一時的な戦術的現象だと説明するために非常な努力を払った。つまり，ＳＰＤは同盟党に影響を及ぼすことはできるが，これら同盟党の方は，ＳＰＤの堅固な正統イデオロギーにいかなる影響も及ぼすことはできないであろう，というのであった。同時代の解説者たちや後の歴史家たちが認識しそこなったことは，二重投票制という選挙制度そのものが——ＳＰＤをも含めて——諸政党の間に第二回目の投票のために不可避的に同盟を生み出していたという事実である。その際，単なる力の誇示のために勝利が求められているのか，それとも政策目的を遂行するために勝利が求められているのかは，はっきりしていなかった。しかし，とにかく公式にみとめられた選挙同盟は，修正主義論争からは，はるかに隔ったものであっ

た。1903年以後，孤立の勝利へ絶えず立ち帰ることによって，ＳＰＤは実際には修正主義者の勧告の多くを遂行しながら，同時に正統派の外観を保持することが可能となった。公式には，社会からの分離は，なお全面的なものであった。より鋭敏な修正主義者たちは，あざ笑っていた。[54]

ＳＰＤ内の有力な要素として帝国議会議員団が出現したことの特別な意味は，ほとんど全く気づかれないままであった。[55] 1913年までは，急進的反対派は，執行部の政策の全路線を全力をあげて追跡していた。彼らは，選挙期間中も，選挙後の帝国議会での活動においても，ブルジョア諸党との協力を非難していた。だが，政策の問題においても，他の多くの組織上の問題においても，どれほど多くの権限が議員団の手中に移ってしまったかについては誰も気づいていなかった。ＳＰＤ議員団が公然と党をコントロールし，永続して政策の後見人の地位にみずから坐るようになったのは，やっと戦争勃発後のことであった。党の規約や哲学の中に，議員団の特別な機能や役割を規定した条項が全くない——ちょうど帝国憲法の中に，政党の存在を認める条項が全くないように——ということが急に認識され始めた。だが，その時でさえ，最大の攻撃を加えるというのが，指導部と，帝国議会内でのその新しい権力基盤の政策であった。こののち３年間にわたって議員団の中に生じた独立派と多数派の対立は，政策に関する不一致が色濃くまといついていたとはいえ，——リープクネヒトを別にすれば——ある程度まで指導部の党規約違反の行動によるものであった。法律家であったハーゼが，党の共同議長の地位を辞任した時，彼はとりわけ党規約の見地から行動したのであった。[56]

それゆえ，結局のところ，ＳＰＤは1914年８月４日に相続党であることをやめ，あらゆる他の政党と同様，圧力団体になった。急進主義者の目からみれば「悪臭ふんぷんたる屍」[57]になった。戦争中，政府との取引の多くは，党が代表するセクト的利益，すなわち労働者の利益のために政府から譲歩をかちとることにむけられた。ＳＰＤの政治的方針は，ますますこの目的に従属するようになり，事実，議員団のメンバーたちは，もし自分た

ちが古き政治目的を追求しつづけるならば，党員たちの利益を政府に反映させることは不可能になるであろうとくり返し宣言した。[58)]

結局のところ，相続党の立場は，相続の機が熟さないならば不可能となると結論してもよさそうである。孤立の状態をいつまでも維持していくことはできない。暴力に行きつくか成功に行きつくか，のどちらかである。これらのいずれかが，植民地諸国の相続党によってとられている。第3の可能性は，創設後5年（1952）にして，フランスの政治生活の重要な要因であることをやめ，1955年までには完全に消滅してしまったＲＰＦ（フランス国民連合）の場合のように解体である。最後の可能性は，成功も暴力も不可能となったＳＰＤによって代表されるものであって，同じような状況にある他の政党と同じく，圧力団体としての役割を徐々に受け入れること，すなわち，相続する代りに報酬を求めて争うことであった。ＳＰＤが社会と自分自身との間に作り出した懸隔と，寡頭制と官僚制への傾向とが，このような路線設定をなんとかくいとめることを助け，変化の過程を党員たちの目に見えなくさせていたのであった。それにもかかわらず，この傾向はすでに1914年以前に存在していた。戦争のような大変動は，しばしば基本的な路線を変更するよりもむしろ，前から内在していた傾向を一層押し進めるものである。そしてもう一度カウツキーが，党の理論的救済のために登場した。戦時と平時とでは，状況に根本的な差異があるのだと主張することによって，彼は再び指導部の思考と態度を代弁したのであった。指導部は，戦争の勃発に強制されてやむをえず確立された伝統から離れたけれども，戦争が終ればまた以前の状態にもどることができ，しかも特別手当（ボーナス）を支給されてもどることができると考えていたのである。

最後に，我々は党指導部に対する反対派を検討してみることにしよう。今まで，社会と社会民主党の関係における隔離—接近という変数にもっぱら強調がおかれてきた。修正主義者は接近を主張し，正統派は隔離を主張した。急進的反対派も接近を主張した——修正主義者とは本質的に異な

った方向ではあるが——ので，第二の変数が導入されなければならない。すなわち，組織—行動という変数が。

自己陶酔の危険は，すでに1904年にローザ・ルクセンブルクを心配させたものであった。修正主義者に対する勝利が，あたかも最終的な勝利であるかのように思われていた。1904年12月17日，彼女は友人のヘンリエッテ・ローラントーホルストあてに書いている。

「迷える羊——党をふたたび“確固とした原則”という羊小屋へ連れもどすことがぜひとも必要なのだという多くの急進派の友人たちの確信も私には不思議です。その場合，こういう全く消極的なやり方では一歩も前進できないということは感じていないのですから。そして，革命運動にとって，前進しないことは，すなわち——後退することです。唯一の道は……みずから前進することです……」[59]

彼女が1906年にロシアから帰ってきた時，革命の時期は，それを利用しようとするいかなる試みもされないままに過ぎ去ろうとしており，党の組織問題への没入が，力のしるしとはならず，かえって弱さのしるし，不動性の要因となっていることが判明した。ロシアでの経験にもとづいて大衆ストライキの戦術的価値を分析したパンフレットの中で，ローザ・ルクセンブルクは，指導者がしたがうべき望ましい政策としてではなく，組織の新しい理論として，行動と運動の概念からなる一教義を発展させるうえで非常な貢献をした。[60] この過程で，彼女は，いかなる社会主義政党も，強力な組織，十分な財源，賢明な指導部にめぐまれた時にのみ，社会が結集する総力に対して勝利を収めることができるのだ，という第2インターナショナル全体が受け入れていた教義を転倒させたのであった。まさにその正反対であったのだ。彼女は，ロシア革命にあっては，行動から実際に組織が生み出されたのだということ，労働組合組織を全く持たない未組織の弱体な社会民主党が，積極果敢な闘争を通じて，党としても組合としても強力な組織をかちえてたち現われてきたということを示そうと試みた。この実例を特殊ロシア的なものとしないために——ドイツ人の目からみればそ

う見えるかもしれないし，事実そうみえたのだが——ローザ・ルクセンブルクは，ドイツの労働組合組織は，社会主義者鎮圧法に反対する運動の中で，その後の自由と寛容の時期よりもはるかに急速に成長したということを示そうとして骨を折った。[61]

この教義を発展させる次の段階は，1910年の選挙権闘争の時期にやってきた。この時はじめて，党指導部が革命の進展にとって障害物となりうるということが明確に認識された。執行部は，この闘争をまじめにやらなかっただけでなく，革命の時期を正しく認識し，——行動を命じたり禁じたりするのではなく——所与の状況に最も適合する武器を選択し，それを大衆に説明すること，とりわけ，可能性の正確な水準に合わせて目標を設定するという自分たちの任務を正しく理解していなかった。[62] 選挙権闘争に対する執行部のいやがらせの中には，この闘争が執行部の権限を犯すことになるという強いほのめかしがあった。1910年にはじめて，組織問題が新しい形で提出された——一体何のための組織なのか？　組織が何か他の目的のためでなく，もっぱら成長するためにのみあるとすれば，それは全くゆゆしきことである。

今やローザ・ルクセンブルクは，自分がアナーキストでないことを強調し，「思うままに空中から魔法でひねり出される」「革命の体操」と自分自身の政策とを峻別するという方法から出発した。[63]「指導者」に対するアンチテーゼとして，彼女は「大衆」を主張したが，それは執行部に対する民衆のコントロールという民主主義的な意味のためというよりも，運動の要因としてであった。[64] 何人も，党指導部に対して党大会の決議に反して行動するよう要求することはできなかった。官僚制の理論も存在せず，あるいはともかくも，マルクス主義分析の発見的教育法にはなじまないものであった。それゆえ，指導部の自己陶酔的傾向を克服するためには，よく知られているオーソドックスな（だが，アナーキスト的でない）用語を使わなければならなかった。それとても，いつでも問題を明確にするのに役立ったわけではないが。だが，ともかく，彼女が「大衆」という概念を用い

たことが，共産主義者と社会主義者の分裂のあとで，社会民主主義者たちをして，ローザ・ルクセンブルクは，ボルシェヴィキの専断に対する多数者民主主義の支持者だったのだ，と主張させることを可能にした。同様にこのことがまた，後の共産主義歴史家をして，同じ誤解から生じた自然発生性の概念——大衆の自然発生的な多数決定が社会民主党にとっての最高の導き手であるという概念を，彼女に由来するものとさせたのであった。事実は，ローザ・ルクセンブルクの著作を注意深く分析してみれば分るように，「大衆」という語は「行動」の同意語として使われており，他方，「指導者」は不動性と自己陶酔を象徴するものであった。

これが，ローザ・ルクセンブルクとカール・リープクネヒトの行動理論の基礎であった。それはダイナミックで弁証法的な教義であった。すなわち，組織と行動とは，お互いに活力を与え合い，お互いを成長せしめ合う，組織の使用のみが，組織を豊かにすることができる，というものであった。この教義の境界は，戦前の数年間に拡張され，そしてもちろん1914年から1918年の間になお一層発展させられ，ドイツ革命の間にそれを実践に適用しようとする試みにおいて頂点に達した。行動はただ執行部の不動性に対して強調されただけでなく，社会民主党に対するその予防的効果もまた強調された。ローザ・ルクセンブルクの見解によれば，積極的な政策のみがプロレタリアートの階級意識の明確化を助け，どれほど多量の著作，講義，組織ももたらしえない程のすぐれた戦術的，理論的教育の場を提供するものである，というのであった。かくして，行動は政治的義務というだけでなく，社会的義務ともなり，ＳＰＤ組織がとらええないあらゆる隙間や隅々にまで入りこむことができたのである。行動の教義は，必然的にお互に相似ているという意味では，アナーキズムとの類似性がみられるのは当然であった。行動と運動の嵐が，当時のヨーロッパ文化の周辺を——より政治的色彩をもったソレルやイタリア未来派はいうにおよばず，芸術や文学一般の中にさえ——強く吹きあれていた。それゆえ，アナーキストとの類似には，それほど意味があるわけではない。ドイツ左翼は，決

してみずから受け入れたマルクス主義の枠組を放棄したわけではなかった。行動の理論は，アナーキズムのそれとは非常に異なった状況のもとで展開された。それは，組織と指導とをともに拒否するというものではなく，特殊な矯正策なのであった。この最も重要な理論を，ローザ・ルクセンブルクは，とりわけロシアの経験からひきだした。だが，これはバクーニン，ニーヴェンホイスその他の同時代のアナーキストの知的個人主義とは鋭く区別されるべきものであった。彼女は，常に行動の付属物としての自己訓練を強調したが——これは，アナーキストが他のヨーロッパの行動哲学と共有していた自己解放の教義とは相入れないものであった。いずれにしても，反対派の圧力のもとでは，理論は極端に走りがちであるし，逆に，説得の希望がある場合には，理論は希薄なものにとどまるであろう。それゆえ，我々はドイツの急進左翼の思想をパンネクックのロマンティックな極端主義や，カール・リープクネヒトの自己犠牲から判断する必要はない。[65] ローザ・ルクセンブルクは，自分の思想は社会に特別な結果をもたらす一度かぎりの大変動を意図したものではなく，党指導部の成長至上主義によって生みだされた原則墨守主義やカテゴリー厳守主義を克服するための一傾向，一思考様式，あるいは結合の一要因として解釈されるべきである，とくりかえし主張していた。行動は解体の要因であると同時に結合の要因であった。そのうえ，ローザ・ルクセンブルクは，効果的な大衆運動は，革命的な時期の存在を前提とするものであって，決して単に個人の決定の結果としてひきおこされるものではないと常に強調していた。

それでは，革命的な時期の存在はどのようにして主張しうるのか。ここに帝国主義論が，必要な手段を提供する。カウツキーの理論によれば，革命的な時期は存在しないことになる——なぜなら，それは社会と社会民主党との間に緊密な相互作用と接触とが存在しない限り，発展しようのないものだからである。帝国主義という言葉は，ドイツにあっては，単に社会的腐敗の一層の深化を意味する言葉にすぎなかった。これに対してローザ・ルクセンブルクとカール・ラデクは，帝国主義という語をまさに正反対の

意味に使った。党の思想を活性化するための手段として大衆ストライキを宣伝しようとして失敗したので，ローザ・ルクセンブルクは必要な解決を与えるものとして社会の方に期待しはじめた。カニングと同じく，彼女は一つの社会の弊害を是正するために，もう一つの社会を持ちこんだ。この場合には，古い方の社会が，社会民主党の病気を直すべきだ，というのであった。1912年以後の彼女の著作の中で，またラデクやメーリンクやマルフレフスキの著作の中でも，帝国主義の理論が展開され，この目的のために利用された。一方，パンネクックやリープクネヒト，ユリアン・ボルハルトのような人々は，帝国主義についての極度に個人的なイデオロギーを発展させた[66]。両者の境界は，ぼやけたものであった。だが，この境界は，ラデクと彼の以前のブレーメンの仲間であるヨハン・クニーフとの戦後の論戦のような思いがけない機会に，きわめて明確に浮かび上ってきた[67]。

かくして，1912年の始めから，極左の中に，社会の行状に対する突然の鋭い関心の復活がみられた。そのような問題についてのほぼ10年にわたる無関心ののち，ローザ・ルクセンブルクは，突如として精力的に社会問題の報告にとりかかった。しかし，何篇かの特殊なスキャンダルについての論説はいずれも，一つの望ましい目的——帝国主義の増大する圧力と，行動でもってそれに答える必要性——にむけられていた[68]。実践的な言葉であらわされた資本主義社会と帝国主義社会のちがいは，社会民主党に対する圧力の程度のちがいを意味するものとなった。ローザ・ルクセンブルクは，党の慎重な孤立政策によって創り出されたギャップは，現実には存在せず，社会は全戦線にわたって社会主義に圧力をかけ続けているということを示そうと試みた。問題に対する総体性の視点を失うことなしに——この総体性の視点こそ，二つの相闘う世界を総体としてとらえようとするマルクス主義理論にとって決定的に重要なものであるが——彼女は，圧力の直接性を証明しうるような実例は，どんなものでもとりあげた。労働組合のストライキの問題であろうと，帝国軍隊における新兵虐待の問題であろうと，ツァーベルンにおける市民人口に比しての軍人数の過剰の問題であ

ろうと，養老院における中毒事件であろうと，結論は常に同じであった。彼女は，特にリープクネヒトが総体性の視点を身につけていないといって，彼とは意見を異にしていた。なぜなら，帝国主義の一側面にのみ熱中することは，その部分の歪曲をもたらすだけであって，全体との不断の対決を忘れさせてしまうからである。

「軍国主義と帝国主義の問題は，今日の政治生活の基本的な節である。政府の政策の問題とかその他の枝葉末節の問題ではなしに，まさに軍国主義と帝国主義のみが，現代の政治生活の鍵をなしている……状況はいつもと同じであるがより緊張が増しているのだ……。帝国主義は，ひきこもるものではなく，我々の方へ突き進んでくるものであり……それによって階級闘争を一層激化させ，社会と社会民主党の対決をより活発にするものである……。社会主義の運動を一層前進させなければならない[69]」。

一貫して彼女は「我々の生きているこの偉大な時代」について語ったが，それは空虚なレトリックとしてではなく，執行部の態度に暗に示されている快適な孤立に反対するものとして，緊迫した闘い——腕には腕を，目には目を，胸には胸を！——を称揚するためであった。彼女は自分の教義を主張するために，1912年選挙のような特殊な政治問題を選び，そこに全く同一の原因をみ，たった一つの解決策を提案しているのであるが，このことは彼女の洗練された叙述の背後に本質的には単純な教義しか伏在していなかったことを証明するものである。

ある意味で，急進的反対派は修正主義者の足跡をたどるものであった。両者ともに社会からの分離を黙認することができなかったのである。両者とも，昔ながらの疎隔を克服するために忍耐強い努力をした。積極的な関係であれ，消極的な関係であれ，つまり，現存秩序と妥協しようという試みであれ，それと精力的にたたかおうという試みであれ，現存秩序と何らかの関係を持つことによって，疎隔を打破ることができる，というのであった。それゆえ，我々は社会主義と社会との間の関係を緊密なものにしたいという願望が，ＳＰＤ内部の急進的反対派の中にも，修正主義者の場合

と同程度に強く働いていたという事実を見落してはならない。1910年から1914年にかけての，執行部に対する左派と右派からの批判の中には，時折，奇妙に共鳴する反響がみられた。カウツキーは，このことに全く気づいていなかったわけではない。[70]

だが，修正主義者と急進派とを分つものは，他の性格の対立であり，もう一組の別の変数——行動—組織——によって表わされる。修正主義者は，党の組織至上主義をあえて問題にしようとはしなかった。彼らは，多数の人々を組織に参加させたいと考えていた。そして，当然のことながら，彼らは議会活動と帝国議会議員団の力の増大を歓迎していた。行動を求める急進派の圧力に関しては，彼らは，1899年の嘲笑でむくい，それを「不可能主義」と呼んだ。[71] 修正主義者にとって，明確に不可能なことの一つは，組織と行動とをともに一つの因果律的な，相互補完的な関係の中に取り込もうとすることであった。

ドイツの左翼は，独特の行動理論を展開した。我々はすでに，この理論の発展と尖鋭化とは，ＳＰＤ指導部の慎重な政策が作り出し，維持してきた真空地帯によるものであり，そこで起ったものである，ということを示そうと試みた。これは，修正主義論争における勝利の直接的な結果であった。修正主義者の敗北——たとえ実践における敗北でなく，投票の上での敗北であるにせよ——は，党を革命的にしておくのに役立つ——当時はそう信じられていたが——どころか，実際にはまさに正反対の結果をもたらしたのである。ＳＰＤを孤立させ，社会からの全面的な疎隔状態を作り出し，それをますます強化することによって，革命的な刺激の可能性は封じこめられてしまった。なぜなら，革命的な刺激は，もっぱら社会との接触によってのみもたらされうるものだからである。さらに，孤立状態は，自己欺瞞が支配的なものとなるような政治文化を生みだした。というのは，現実の実績に照して革命神話をチェックする手段が破壊されてしまったからである。このような状況の中で，革命的マルクス主義からダイナミック

な内容をぬきとり，ついには，社会の崩壊を社会民主党の政策や活動から切り離してしまう新しい哲学が（カウツキーによって）発展させられた。社会の崩壊は，純粋に形式的な意味をもつものにすぎなくなった。したがって，この哲学に反対する人はだれでも，党の孤立状態と自己陶酔とを打ち破ろうという衝動から出発したのは当然のことであった。

他の所で，しかし同時に，全く異なった行動理論がレーニンによって発展させられていた。この理論は，組織の役割に積極的な意味を振り当てるものであった。だが，この理論もまた社会からの孤立という条件のもとで展開されたものであった。ボルシェヴィキ指導部は，第一次ロシア革命の短かい期間を除いて外国に亡命していた。レーニンの思想もまた——ちょうど，ドイツ左翼の思想がＳＰＤ内部の諸条件によって規定されていたように——彼をとりまく直接的環境，すなわちロシア社会民主党の産物であった。革命の手段は，革命が打倒しようともくろんでいる社会との闘争によってではなく，組織や政策がいまだ未熟であると考えられている社会主義政党の枠組の中で発展させられたのであった。レーニンは，自分を助けるために帝国主義を持ち込んでくることをしなかった。ボルシェヴィキの孤立は，慎重に配慮されたものであり，みずから課したものであった。彼は，健全な核から外に向ってロシア社会民主党を活性化させようとしたのであり，帝国主義から内に向ってではなかった。ドイツ左翼は，組織に対して行動を強調したが，レーニンは，行動のための手段として組織を説いた。だが，行動を強調する点で両者は共通であった。——そして，行動に対するこの強調が，ドイツ左翼とロシア・ボルシェヴィキとを，多くの重大な意見の不一致にもかかわらず，最終的には同じ陣営に結集せしめたのである。1918年９月に書かれたボルシェヴィキ革命に関する評論の中で，ローザ・ルクセンブルクは，ボルシェヴィキの行動へのコミットメントをとりわけ称揚したのであった。ここに彼女は，自分自身の思想に強く共鳴するものを見出したのであり，それを彼女自身の用語で次のように正確に分析した。

「権力の掌握と革命の前進によって，ボルシェヴィキは，久しくドイツ社会民主党を圧迫しつづけてきた『人民の多数』という有名な問題を解決した。……多数を通って革命的戦術へではなく，革命的戦術を通って多数へ……」[72]。

大衆支持の結果としての行動ではなく，その要因としての行動という見解によって，彼女は，ボルシェヴィキが彼女自身の思想を実践に適用しているのをみた。そして，ついでにいえば，これはまた，彼女が多数とか大衆とかについて語るとき，それによって何を言おうとしていたのかについての明白な証拠を我々に提供するものである。ボルシェヴィキの政策に対するその他の厳しい批判にもかかわらず，ドイツ左翼が明確にボルシェヴィキを支持することになったのは，まさにボルシェヴィキによる問題のこのような解決法のおかげなのである。

組織と行動というこの一組の因子が，その後のソヴィエト同盟の歴史にどのような影響を与えたかを分析することは，困難なことではない。レーニンは組織の方を優越させたが，このことは社会というより大きな概念についての一定の無関心を生み出した。ちょうどＳＰＤの諸会議がそうであったように。かくして，戦時共産主義からネップ（新経済政策）への急激な政策転換，事実上，部分的に資本主義社会を進んで復活させようとする政策への転換は，結局のところ，正しい組織と適切な理論的訓練とが党中央に保持されているならば，社会はさしあたりは自分のことを自分で処理することができ，社会の欠陥が党に影響を及ぼすことはできないという信念にもとづくものであった。レーニンによれば，党と社会の関係の機能的方向は，いつでも内から外へであった。つまり，中核が健全でさえあれば，周囲の状態などはさして重要ではなかったのである。この点で，彼の分析は，ＳＰＤのイデオロギーと似ていたが，戦争の前にも後にも党を活性化するための手段として社会を使うことが必要だと考えたドイツ左翼とは完全に異なっていた。ローザ・ルクセンブルクが，若きドイツ共産党の綱領として提出した教義，すなわち，長期にわたる革命的発展の過程の終

局においてのみ，権力を握りうるという教義は，レーニンの仮定とは正反対の仮定にもとづくものであった。レーニンの仮定とは，社会主義的方向での社会の大変動のみが，真に社会主義政党の支配を可能にするというものであったからである。[73)]

ある程度まで，この過程をひっくり返し，逆説的に古いドイツ左翼の思想により近い政策を採用したのはスターリンであった。大粛清の間に，彼はレーニン主義者による党と社会の区別をぶち破り，両者をより低いレベルではあるがより平等な基盤の上においたのである。農業集団化の過程で社会に対してむけられた強制の手段が，今度は党に対してむけられた。その結果——全く異なった関連においてではあるが——党内に発展してきたと考えられる不満足な構造や自足したイデオロギーを清算するための手段として，もう一度社会が導入された。同時に，予防薬としての行動という観念が，集団農場化と第一次五ケ年計画の過程で重要性をかちえた，その際，レーニンの神聖にして犯すべからざる組織の中核という観念は犠牲に供された。スターリンの時代は，組織構造における絶え間ない変転によって特徴づけられる。さまざまな制度と職務とが，急速に現われては消えた。職員は猛スピードで移しかえられた——まさに不動性を避け，社会の要求にマッチさせ，みずから党の内部にいることを自覚させることができるようにするためであった。事実，現実に展開されている全ソヴィエトの経済発展モデルは，キャンペインとシュトゥルムオプシチーナ(sturmovshchina) の絶えざる変転という状態のもとで，高度に官僚的な計画システムを維持しようとする試みとして解釈されうるのである。経済発展の要因として社会的緊張を作り出すべきだという考え方は，低開発諸国の急速な工業化は官僚的安定と秩序立った計画という条件のもとではなく，変動と政治的モビリゼイションという条件のもとでのみ可能であるという理論を生み出した。[74)] 行動という言葉が，上述の意味でＳＰＤ指導部に反対してドイツ左翼によって始めて使われて以来，この言葉には連綿たる立派な伝統があるのである。

我々は，我々の二変数モデルを戦前のＳＰＤに関してやや詳しく検討し，さらに，それが有効に適用されうると思われるいくつかの領域——植民地諸国の相続党から西欧社会のいくかの抗議政党，ソヴィエト同盟の共産党にいたるまで——を簡単に示唆した。適用の可能性は単にスケッチされているにすぎないが，このモデルが一連の問題，たとえば，今日の中ソ論争などにも有用な分析の道具として役立つことを望むものである。さらに，我々は，問題を，ドイツ帝国の他の政党との関連においては水平的に，戦前のボルシェヴィキを革命後のロシアとリンクさせる場合には，時間的に，一つの連続体として示そうと試みた。

闘争と組織の関連は，現在社会学によっても認められている。[75] ひとつの「階級」または，ひとつのグループと「社会」または他のすべてのグループとの関連もそうである。政治的な文脈においては，我々の問題は，社会学的定義を用いて次のように言いかえることもできるであろう。つまり，当時ＳＰＤ内に存在していたものは，明確な利益集団（効果的な政治行動へも手をひろげる利益集団，すなわち修正主義者たち），第二に，闘争の積み重ねを通じて諸利益を集約しようと試みるが，明確な政治的信念をもたないグループ（孤立せるＳＰＤ），第三に，いかなる意味でも利益集団ではなく，激しい闘争のつみ重ね（帝国主義との）と強力な政治的信念をもったグループ（ドイツ左翼）の差異であった。現代社会学によって予示された可能性は，政治上の組織，ダイナミックス，諸関係の研究にいまだ十分に利用されているとはいえない。とりわけ，ダイナミックスの研究は困難である。というのは，変化するほとんどの画面が，「不動の画面から構成されたもの……一つのシーン，ついで全く別の新しいシーン，この無限のくり返し」[76] という映画のようなものだからである。タルコット・パーソンズを，とりわけ悩ませたこの問題は，ずっと以前にローザ・ルクセンブルクを悩ませた問題である。[77] この分野においては，戦前のＳＰＤにおける事態の展開についての我々のアプローチもまた，部分的には有用な貢献となりうるかもしれない。

〔原注〕

1) "Rechtliche Ordnung des Parteiwesens", *Bericht der … Parteienrechtskommission* (Berlin, 1957), p. 5.

2) たとえば，みよ。Robert von Mohl, *Lebenserinnerungen*(Stuttgart, 1902), ii, p. 171.

3)「イデオロギー」という語は，現在の社会のイメージを表現するのに使われる。当時使われていたマルクス主義の分析道具は「哲学」と呼ばれた。「ユートピア」とは，カール・マンハイムの使った意味ではよりよい未来のヴィジョンを示すために使われる。*Ideology and Utopia* (London, 1960 edn.), pp.49 f., 173 f.

4) マックス・ヴエーバーの社会民主党への言及をみよ。*Gesammelte Politische Schriften* (Tübingen, 1958); さらに，たとえばラインハルト・ベンディックスのこの点への言及をみよ。"Public authority in a developing political community. The case of India," *European Jl. of Sociology*, iv (1963), p. 51.

5) Paul Frölich's introduction to Rosa Luxemburg, *Gesammelte Werke* (Berlin, 1925), iii, p. 16. *Neue Zeit*, 1897-8, vol. i, p. 740. もみよ。

6) とりわけみよ。Werner Sombart, *Dennoch! Aus Theorie und Geschichte der gewerkschaftlichen Arbeiterbewegung* (Jena, 1900).

7) ローザ・ルクセンブルクへのメーリンクの序言をみよ。"Die deutsche Wissenschaft hinter den Arbeitern", *Neue Zeit*, 1900-1, vol. i, p. 740. だが，彼女は1910年11月にある友人に書いている。「ゾンバルトは，我々のしているような史的唯物論の技術的適用に対する批判においては完全に正しいのです。…それはカウツキーによって代表されているのですが，マルクス理論のカリカチュア以外の何ものでもありません」(Unpublished letter : photocopy in archives of Zaklad Historii Partii, KC PZPR, Warsaw).

8) 外国の読者のためのこの見解の簡潔な説明としては，Theodor Barth, "Kaiser Wilhelm II und die Sozialdemokratie," *Cosmopolis*, i (1896), p. 873.

9) Carl E. Schorske, *German Social Democracy 1905-1917* (Cambridge, Mass., 1955), p. 118.

10) この分析を体系的なものにするために，ショルスケは，次のような分類を試みた。修正主義者，執行部，中央派，中央派左派，そして最後の水脈としての——急進派。

11) *Protokoll des Parteitags der SPD, 1913*, pp. 194, 288-93, 485.

12) たとえば，バーデンの地方オルガナイザーであるメルケルが，ディットマンにあてた手紙をみよ。23 June 1913 in Dittmann papers, SPD archives, Bonn.

13) 秘密にすべきかどうかというこの問題についての公的な討論に関しては，*Pro-*

tokoll……1911 をみよ。

14) Karl Kautsky, "Zukunftsstaaten der Vergangenheit", *Neue Zeit*, 1893-4, vol. i, pp. 653-63, 684-96.

15) たとえば, *Protokoll…1899*, pp. 186, 291.

16) たとえば, みよ。Eduard Bernstein, "Reorganisation der Parteileitung", *Sozialistische Monatshefte*, xv (1911) p. 1326 ; Georg Ledebour, "Die Reorganisierung des Parteivorstandes", *Neue Zeit*, 1910-1, vol. ii, p. 457.

17) Rosa Luxemburg, "Organisatsionnie voprosi ruskoi Sotsialdemokratii", *Iskra*, no. 69 (1904).

18) *Proceedings of International Socialist Congress at Paris, 1900*, p. 37.

19) Georges Suarez, *Briand : Sa vie, son oeuvre avec son journal et de nombreux documents inédits*, vol. i (Paris, 1938), p. 463.

20) *Compte rendu analytique, 6è Congrès Socialiste international, Amsterdam 1904*, p. 174.

21) この点は, 資料へ十分に言及しながら, ショルスケが論じている。*op. cit.*, pp. 118-36.

22) Heinrich Schulz, "Zwei Jahre Arbeiterbildung", *Neue Zeit*, 1907-8, vol. ii, p. 883.

23) ライプチガー・フォルクスツァイトゥング紙の編集者の息子であったブルーノー・シェーンランクは, そのような労働者詩人として出世し, 著者にそのことを書いてきた。

24) *Protokoll……1912*, p. 13.

25) たとえば, オットウ・ブラウンは, 最初東プロシアのケーニヒスベルクで名をあげた。彼は1906年には統制委員会に加わり, 1911年には執行部の一員となった。同様に, シャイデマンの初期の党活動は, ヘッセンの農村地帯におけるアジテーションであった。

26) Karl Korn, *Die Arbeiterjugendbewegung* (Berlin, 1923), and the section in Schorske, *op. cit.*, pp. 97-108.

27) Friedrich Ebert, *Schriften, Aufzeichnungen, Reden* (Dresden, 1926), i, pp. 70-5.

28) 左派の見解については, *Protokoll……1905*, p. 361 をみよ。中央派からの侵害に対する防波堤としての強力な地方組織という修正主義者の見解については, *Sozialistische Monatshefte*, ix (1905), pp. 767-70.

29) *Protokoll……1911*, p. 173.

30) *Ibid.*, p. 216.

31) たとえば，アムステルダムの国際社会史研究所にあるベーベルからカウツキーへの手紙をみよ。Kautsky papers, D Ⅲ.

32) 第一次世界大戦前のヨーロッパ諸国における労働組合と社会主義政党の関係がもたらす政治的効果の分析としては，Maurice Duverger, *Political Parties* (London, 1959), p. 5 ff,

33) Alexis de Tocqueville, *Democracy in America* (New York, 1956 edn.), pp. 295, 303.

34) Robert Michels, *Zur Soziologie des Parteiwesens in der modernen Demokratie* (Leipzig, 1911) —— Engl. trans., *Political Parties* (London, 1959); and an article, "Die Deutsche Sozialdemokratie" in *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik,* xxiii (1906), pp. 471-556.

35) Michels, *Political Parties,* p. 368.

36) *Ibid.*, p. 367.

37) Herbert Tingsten, "Stability and Vitality in Swedish Democracy", *Political Quarterly,* ii (1955), p. 145. 一般的な社会学的概念は次の著書に展開されている。R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure* (Glencoe, Illinois, 1957), chap. I. この関連でのＳＰＤへの唯一の言及は，Ulf Himmelstrand, "A Theoretical and Empirical Approach to Depoliticization and Political Involvement", *Acta Sociologica,* vi (1962), p. 95.

38) Mannheim, *op. cit,* p. 173, 前記の注３）もみよ。

39) ベーベルのカウツキーあての手紙と前記の注31）をみよ。ロシア社会民主党内部の紛争に関するドイツ側の公式の反応を分析したものとして，D. Geyer, "Die russische Parteispaltung im Urteil der deutschen Sozialdemokratie", *International Rev. of Social Hist.*, iii (1958), pp. 195, 418.

40) 晩餐会席上でのアウグスト・ベーベルとの会話を伝えるチューリヒ駐在イギリス総領事の手紙をみよ。Sir Henry Augst to William J. Braithwaite, 22. Oct. 1910, in *Lloyd George's Ambulance Wagon* ; *The Memoirs of W. J. Braithwaite* (London, 1957), pp. 65-6.

41) ポーランド問題に対するＳＰＤの態度については，Hans Ulrich Wehler, *Sozialdemokratie und Nationalstaat* (Würzburg, 1962). ミヘルスも，この点をとりあげた。*Political Parties,* p. 395.

42) イギリス医学協会の研究をみよ。Harry Eckstein, *Pressure Group Politics, The Case of the British Medical Association* (London, 1960), p. 21.

43) Gerhard Ritter, *Die Arbeiterbewegung im Wilhelminischen Reich* (Berlin, 1959), p. 52.

44) Karl Kautsky, *Der Weg zur Macht* (Berlin, 1909)

45) *Die Glocke,* vol. i (1915), p. 20.

46) *Op. cit.,* p. 124.

47) Erich Matthias, "Kautsky und der Kautskyanismus", in *Marxismusstudien,* 2nd Ser. (Tübingen, 1957), pp. 172 ff.

48) *Vorwärts,* 25 February, 6 March 1912.

49) Even by Michels, "Die deutsche Sozialdemokratie", p. 477.

50) 1912年1月18日付のローザ・ルクセンブルクの友人への手紙。in the archives of Zaklad Historii Partii KC PZPR Warsaw.

51) Von Bethmann-Hollweg, *Betrachtungen zum Weltkrieg* (Berlin, 1919), i, p. 95.

52) Hans-Gunter Zmarliks, *Bethmann-Hollweg als Reichskanzler 1909-14* (Düsseldorf, 1957), pp. 114-30.

53) 政府と帝国議会の関係についての最近の簡単な討論については, Eberhard Pikart, "Die Rolle der Parteien im deutschen konstitutionellen System vor 1914", *Zeitschrift für Politik,* ix (1962), pp. 12-32.

54) *Sozialistische Monatshefte,* xvi (1912), p. 1167.

55) 事実, この発展は, 左翼諸政党が成長し, かれらの組織を強化するにつれて, 議会グループの力は, 組織の中で減少していくであろうという一般的に受け入れられた概念に反するものであった。Duverger, *Political Parties,* p. 185.

56) Ernst Haase, *Hugo Haase, Sein Leben und Wirken* (Berlin, no date), pp. 120-30.

57) Lenin, *Sochinenya* (4th edn,), vol. xxxiii, p. 184.

58) *Protokoll der Reichskonferenz der Sozialdemokratie Deutschlands … September 1916* (Berlin, no date), pp. 7-10.

59) Henriette Roland-Holst, *Rosa Luxemburg* (Zurich, 1937), p. 216. に引用されている。

60) *Massenstreik, Partei und Gewerkschaften* (Hamburg, 1906), *Gesammelte Werke,* vol. iv, pp. 410-79. に再録。

61) *Ibid.,* p. 453.

62) "Die Theorie und die Praxis", *ibid.,* pp. 589-90.

63) "Massenstreik", *ibid.,* p. 411.

64) たとえば, "Wieder Masse und Führer", *Leipziger Volkszeitung,* 29 Aug. 1911.

65) Anton Pannekoek, *Neue Zeit,* 1911-2. vol. ii, pp. 548, 810 ff. リーブクネヒトに関しては, *Politische Aufzeichnungen aus seinem Nachlass* (Berlin, 1921).

66) 1917年3月10日付 *Arbeiterpolitik* 紙所載のドイツの国際社会主義者の声明をみよ。*Dokumente und Materialien zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung* (Berlin-East, 1958), i, p. 574. に再録。

67) Otto Ernst Schüddekopf, "Karl Radek in Berlin", *Archiv für Sozialgeschichte,* ii (1962), pp. 135-6. にあるラデクの日記をみよ。

68) たとえば, "Im Asyl", *Die Gleichheit,* I Jan. 1912 ; *Gesammelte Werke,* vol. iv, p. 150. に再録。

69) *Die Gleichheit,* 5, Feb. 1912.

70) 彼の論文 "Zwischen Baden und Luxemburg", *Neue Zeit,* 1909-10, vol. ii, p. 667. を見よ。

71) Max Schippel, "Die neuesten Vorstösse unserer Impossibilisten", *Sozialistische Monatshefte,* xvi (1912), p. 280.

72) *Die Russische Revolution,* edn. Flechtheim, (Frankfurt, 1963), p. 54. 強調はネトル。

73) *Bericht über den Gründungstag der KPD* (*Spartakusbund*) (Berlin, no date), p. 56.

74) たとえば, A. O. Hirschmann, *The Strategy of Economic Development* (Newhaven, 1958) ; Jacques Perroux, *La Coexistence pacifique* (Paris, 1958) ; Gunnar Myrdal, *Economic Theory in Under-developed Regions* (London. 1957).

75) たとえば, Ralf Dahrendorf, *Class and Class Conflict in an Industrial Society* (London, 1959), p. 213.

76) Henri Bergson, "Die Wahrnehmung der Veränderung" in *Denken und Schöpferisches Werden* (Meisenheim, 1958), p. 165.

77) *Essays in Sociological Theory* (Glencoe, Illinois, 1954), p. 217.

(1980. 9. 1.)